
Soft Tennis

アメリカンなお調子者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S o f t T e n n i s

【Nコード】

N 3 1 7 2 0

【作者名】

アメリカンなお調子者

【あらすじ】

ソフトテニスをはじめ

入学式

入学式。

祐史「1年1組・・・つまんねー、普通なクラスやん」

将太「よー、祐史、何組だった？」

祐史「1組だった。将太は？」

将太「俺？7組」

祐史「は？一番遠いじゃん！つまんねー」

・・・

俺の名は、イナモトユウジ稲本祐史

小学校時代、近所のテニスクラブに入って、イトウシヨウタ伊東将太とダブルスで

小学生の全国大会を制した。

将太「んでー？祐史何部入る？」

祐史「テニス部ねーの？」

将太「テニス部は無いけど、ソフトテニス部はあるよ」

祐史「ふーん、少し行ってみるか。」

純介「はいはいどーした1年？おせえ！おせえ！弱すぎだろてめーら？」

謙一「だって・・・僕たち・・・」

俊英「初心者だし・・・」

廉太郎「関係ねえよ！ほら！このボール捕れ！」

謙一「こんなショット・・・取れる訳・・・！」

顔面に直撃した。

俊英「大丈夫？謙一！」

廉太郎「てめーもボーっとして、助けようとしてんじゃねーよ！」

俊英「ス・・・スマツシュ！！」

廉太郎「オラアアアアアアツ！！！！」

バシイイイッ！！

将太「はいそこまでー、やめといた方がいいよ？結構あんたいい才能持ってるのに・・・」

将太は素手で、ボールを止めた

祐史「宝の持ち腐れってやつ？」

廉太郎「なんだてめーら、調子こいてんじゃねーよ！一年坊主が
あ！」

純介「ムカつときたわ・・・県大会ベスト4の俺らと戦わせてベソ
かかせてやるわガキがっ！」

入学式（後書き）

稲本祐史 12歳 10月1日生まれ

右利き、ラケット：NANOFORCE 8V REV(YONE
X)

伊東将太 13歳 4月4日生まれ

左利き、ラケット：Xyst XZ-1 (MIZUNO)

初スマッシュ

純介「おい、そこのガキ！」

将太「んー？」

純介「お前、ラケットねーだろ！？」

祐史「硬式ラケットしかないけど・・・」

廉太郎「お前ら、硬式やってたの？」

祐史「まーね。」

純介「てめえら、ガキには、それで十分だろ？」

将太「いいけど・・・。」

・・・

俊英「じゃ・・・じゃあ、僕が審判をします。サーブは、純介、廉太郎ペアからでー！」

5ゲームマッチプレイボール！！

・・・

純介「瞬殺してやる・・・！」

純介は高いトスを上げた。

純介「オラア……よおっ！！！！！」

スパアアアアアッ

謙一「は……速い！！！」

将太「あらよ……っ」と

将太は軽い感じで返した。

しかし、球は伸びず、ネットに引っかかった。

将太「あれ？やっぱりソフトとは違うか。」

祐史「当たり前だ。なんであんなに遅いサーブをミスってんだよ。」

その言葉に、純介は怒りを感じた。

純介「遅い……？じゃあ、てめーは取れんのか？」

1 - 0

純介「しねえええええっ！！！！！」

スパアアアアアアアアアアアアアアアアッ

祐史「まだ……遅いよっ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3172o/>

Soft Tennis

2010年10月18日19時13分発行